『苦海浄土』「草の親」における「ゆり」と家族の表象― 諸メディアとの比較を通して ―

林宜蓁

はじめに

筆者はかつて石牟礼道子『苦海浄土』の評価の変遷を検討し、最終的には「無限にノンフィクションに近い フィクション」と位置付けた（林宜蓁「石牟礼道子『苦海浄土』刊行史および評価の変遷」京都芸術大学大学院紀要２号）。本稿は『苦海浄土』の文学としてのフィクション性をさらにあきらかにすべく、作品中の「草の親」に描かれた幼児性水俣病患者「ゆり」の表象の特性を、医学文書、桑原史成の写真作品、首藤留夫の小説『生ける人形の告発』における松永久美子の表象と比較し、探究するものである。

本論の構成は、まず「草の親」の「ゆり」のモデルが実際の患者であった松永久美子であることを確認し、次に主として首藤留夫の小説『生ける人形の告発』における松永久美子と「ゆり」とを特に母–娘の関係性の視点から比較して論じる。結論として『苦海浄土』「草の親」における病者の表象の特性をあきらかにするという構成をとる。

第１章　松永久美子と「杉原ゆり」

第１節　医学文書における松永久美子

原田正純は医学論文「小児水俣病の臨床症状」において、ある小児水俣病症例について、「症例3　K.M.　女子、1950年11月８日生。歌が好きで上手な子供で、よく大きな声で歌をうたって近所では評判だったという。」[1]と記述している。また武内忠男・衛藤光明「水俣病の病理各論」[2]にも「K.M.」（女子、1950年11月８日生）が取り上げられ、その臨床症状の経過が述べられている。両者の患者「K.M.」についての臨床症状経過の記述を表１に整理した。両者を照合わせると、患者「K.M.」はあきらかに同じ人物に指していると考えられる。

第２節 桑原史成の写真集のなかの「生ける人形」＝松永久美子＝「杉原ゆり」

2004年の『桑原史成写真全集１水俣』には、「天女」「生ける人形」などの語とともに病院のベッドの上で目を見開いている少女の写真が掲載されている[3]。2013年の桑原史成『水俣事件』では同一人物の写真に「生ける人形」というタイトルが付され、その写真キャプションに「水俣病専用病棟で、私は一人の美少女に釘付けとなった。松永久美子、当時９歳８カ月。まさに“天女”かと思った。元気に生まれたが、５歳７カ月で突然寝たきりに。失外套症候群、大半を無動無言の十八年。23歳９カ月で死亡、一〇〇人目の認定死者だった。」[4]と記している。これを見ると桑原がはじめ「生ける人形」と描いた少女が松永久美子であったことがわかる。

上記の医学文書における「K.M.」と石牟礼道子『苦海浄土』の「草の親」における「ゆり」の描写を対照すると、共通箇所が多くある。松永久美子は次女で、元々は活発な女子であったのに、５歳のとき突然病気に襲われ、外界との連絡が断絶する。見た目が綺麗なため、メディアが取り上げ、「生ける人形」として有名になる。医学文書にある「失外套症候群」(Apallic syndrome)とは、大脳皮質の損傷によって大脳皮質の機能が完全に失われてしまった状態である。眼球運動、体動、言葉の全てが阻害されるが、睡眠と覚醒の調節は保たれている。刺激に対する反射は残っているが、神経系で伝達される情報の統合が出来なくなっているため、自身が置かれた状況の把握や自発的な行動は全く不可能な状態である。『苦海浄土』の「草の親」の「ゆり」も「杉原彦次の次女」であり、その症状は次のように描かれている。

> むざんにうつくしく生まれついた少女のことを、ジャーナリズムはかつて、“ミルクのみ人形”と名づけた。現代医学は、彼女の緩慢の死、あるいはその生のさまを、規定しかねて、「植物的な生き方」ともいう。
> 黒くてながいまつ毛。切れの長いまなじりは昼の光線のただなかで茫漠たる不審にむけてみひらき、その頭蓋の底の大脳皮質や小脳顆粒細胞の“荒廃”やあるいは“脱落”や“消失”に耐えている。メチル水銀化合物アルキール水銀基の侵蝕に（191）[5]。

ここでの「植物的な生き方」、「茫漠たる不審にむけられてみひら」かれたまなざし、そして「大脳

皮質や小脳顆粒細胞」がメチル水銀化合物によって「荒廃」し「脱落」「消失」しているという記述は、松永久美子の「失外套症候群」と一致する。また、6歳で奇病に罹り、病院を転々と移り、姉は軽症水俣病で、母が毎日看護に来るという「草の親」の設定も松永久美子と重なる。「表1」にまとめたが、松永久美子は1956年6月18日に新日窒病院に入院、同年8月30日に熊本小児科へ転院、1959年7月29日には水俣市立病院に、1965年3月12日には湯の児分院に転院し、1972年7月に再び水俣市立病院に戻っている。

「草の親」の「ゆり」には次のような描写がある。

> 親の目には、なして、顔だけは干こけも曲がりも壊えもせずに、かえってうつくしゅうなってゆくごと、見ゆるとじゃろう、これはどういう神さんのこころじゃろ。人よりもおろよかかあちゃんから生まれてきたくせに、このような眸ば、神さんからもろうてきて。
> なして目をあけたまんまで眠っとるかい。ゆり、ほら、蠅の来たよ。蠅の来てとまったよ、眸に（193-194）。

少女の美しい目と汚らしい印象を与える蠅との劇的な対比が読者の心に衝撃を与える箇所である。これは一見小説家が拵えたエピソードのように思えるが、前述の原田の「K.M.」臨床診断には「1969年6月16日の状態：寝たきりで自力で体位交換も不能で自発運動も全くない。目は比較的に澄んでおり、昏睡・昏迷状態の目つきではない。しかし、全く無表情、無反応、目に蠅がとまっても瞬目しない」[6]と記されている。医学論文は性質上客観的な症状のみ記述するのが普通だが、久美子の澄んだ特徴的な目は医学者にも強い印象を与えたようである。「目に蝿がとまっても瞬目しない」という記述には客観的症例記述を越えた医学者側の患者によりそう姿勢、あるいは見るに忍びないという感情が垣間見える。

原田は久美子が「歌が好きで上手な子供で、よく大きな声で歌をうたって近所では評判だった」[7]と述べているが、2013年の桑原史成『水俣事件』にも久美子が「元気に生まれた」と記されている[8]。「草の親」では水俣病になる以前の活発な「ゆり」の姿が次のように描写されている。

> 三つ子の頃から海に漬かり、海に漬ければ喜うで、四つ五つのおなごの子が、ちゃんと浮くみちをおぼえて、髪の切り下げたのをひらひらさせて波にひろげて。手足を動かせばそのまま泳げて。
> （略）一年生にあがるちゅうて喜んで、まあだ帳面いっちょ、本いっちょ、入っとらん空のランドセルば背負うて石垣道ばぴょんぴょん飛んでおりて、そこら近辺みせびらかしてまわりよったが――（194）。

原田は久美子の歌好きに言及しているが、「草の親」では（「ゆり」は）今「唄もうたわんとかい」（194）と触れられている。

「草の親」の後半部の「杉原ゆり」の病歴は、熊本大学水俣病医学研究班が昭和31年（1956年）8月から昭和41年（1966年）3月に至る10年の歳月をかけてまとめた『水俣病――有機水銀中毒に関する研究――』における「松○久○子　女（NO.4）」の症例とほぼ重なる。両者とも発病年齢が5歳7月、発病日が昭和31年6月8日である。『水俣病――有機水銀中毒に関する研究――』から病歴の概要を以下に引用する[9]。

> 例2　松○久○子　女（NO.4）
> 発病年令　5歳7カ月
> 発病　　　昭和31年6月8日
> 　　　　　漁業、姉も発病、本人もそれ迄は全く健康。
> 6月 8日 流涎著明。
> 6月15日 上肢、手指の運動不円滑。
> 6月18日 手指震顫、歩行障碍。
> 6月20日 発語不明瞭、新日窒工場附属病院入院。
> 7月 3日 歩行全く不能、頭部震顫出現。
> 7月10日 視力障害。
> 7月30日 発語不能。
> 8月30日　当科入院、強直性麻痺、不眠、狂燥状態、諦泣、視力全くなく、聴力、言語、意識障碍著明。寝返り、起立、歩行不能、嚥下障害（＋）、著名な腱反射亢進、足搐搦あり、尿尿失禁。

以上のように考察してくると、医学論文における「K.M.」と桑原の写真作品の被写体である「生きる人形」＝松永久美子は同一の人物であり、それが『苦海浄土』の「草の親」の「杉原ゆり」のモデルとなったことは疑い得ない。

第2章　『苦海浄土』の「草の親」におけるゆりの表象

第１節　「草の親」の語り

「草の親」の導入部は第三人称の「ナレーション」的な描写で、石牟礼の独白のように見える。

> 年月は、岩をうかがってゆく潮の満ち干になんとよく似ていることだろう。それは風化や侵蝕やをもたらす。ことにこのような岸辺に住みついている人びとにとっては――。
> 杉原彦次の次女ゆり。41 号患者。
> むざんにうつくしく生まれついた少女のことを、ジャーナリズムはかつて“ミルクのみ人形”と名づけた。現代医学は、彼女の緩慢の死、あるいはその生のさまを、規定しかねて、「植物的な生き方」ともいう。
> 黒くてながいまつ毛。切れの長いまなじりは昼の光線のただなかで茫漠たる不審にむけてみひらき、その頭蓋の底の大脳皮質や小脳顆粒細胞の“荒廃”やあるいは“脱落”や“消失”に耐えている。メチル水銀化合物アルキール水銀基の侵蝕に（191）。

背景から被写体へズームインする映画の技法のように、視点は遠い海岸から建物に移り、さらに一つの人物に焦点を絞る描写となっている。この語りは久美子の状況を文学的に手際よくまとめると同時に、医学用語の使用により、現実の病状の重みを醸し出している。感情表出は控えめでありながら、文字の裏に潜んだ怒りが伺える。浄瑠璃や説経節のイントロダクションと同じく、人物紹介の後には、劇場の幕を上げるように、母さと、父、ゆり三人が登場する。場面は続いて病室へと移り、意識を喪失したゆりと、母と父との「会話」が繰り広げられる。母はまるで嵐の日の海の波のように、次々と質問を硬い黒い岩のような静かな父に投げかける。

「草の親」の終結部は熊本大学水俣病医学研究班の医学論文集『水俣病――有機水銀中毒に関する研究――』中の松永久美子のカルテの引用である。名前は「杉原ゆり」と変更され、最初に彼女の臨床症状と発症時間を簡潔に紹介したあと、主に精神症状に集中して引用している。有機水銀は神経の働きを侵すが、神経症状が精神症状を生み出していく。病状の進行につれて精神症状と神経症状はともに相互に移行し入れ替わり、区別がつけにくくなる。水俣病患者の精神症状を中心に書かれていることが「草の親」の最大の特徴だと考えられる。

第２節　「草の親」における家族３人の語り

「草の親」における家族３人の語りのうち、主要な部分を占めるのは、主に沈黙する父へ母が投げかける疑問と愚痴である。注目すべき点は、母が神経症状を「魂」の概念を援用して述べていることである。

> 魂もなか人形じゃと、新聞にも書いてあったげなが……、大学の先生方もそげんいうて、あきらめたほうがよかといいなはる。親ちゅうもんはなあ、あきらめられんよなあ。大学の先生方もわが子ばそうされれば諦めつかすじゃろうか。まして会社のえらか衆の子どんがそげんなれば、その子の親は。（195）

すでにゆりは人間性を喪失した人形になっているという外部の指摘に母は憤りを覚えている。ゆりの聴覚は機能していないにも関わらず、母はゆりの食事の世話をする際に必ず「ごはんは、うまかったかい。」（192）と聞く。父には「とうちゃん、ゆりは達者になるじゃろか」（192）と問いかけ、ゆりは入院した時より太ったと囁き（193）、まるでゆりが近い将来健康体に戻り、幸せな人生を歩んでいけるような心境を示している。「草の親」の母はずっとゆりに人間性があることを信じているのである。

それでも母もゆりの人間性を疑う瞬間がある。「とうちゃん、ゆりは、とかげの子のごたる手つきしとるばい。死んで干あがった、とかげのごたる。そして鳥のごたるよ。目あけて首のだらりとするけん」（193）というが、すぐにその考えを否定する理由を探し始める。このような理不尽に遭遇したため、母には数え切れない疑問がわきあがってくる。一指欠けることなしに生まれてきた娘・ゆりは、日に日に症状を悪化させていく一方で、ますます美しくなってゆく。母は問い続ける。これは、神の意志なのか？ 何で私の子を奪うのか？ 命が神から授かったものなら、神が奪ってもいいというのか。それにしても、全てを奪わずに、なぜ美しさだけが残されているのか（193）？母の問いかけには、娘が未知の病気に侵され、しかも容姿の美しさだけが残されたにもかかわらず、美しさが未知の悪に犯されても反抗できないという重層的な悲しみの構造が作り出されている。

母は木、草、ミミズにも魂はあるのになぜゆりはないのか、と疑問を呈する。魂さえ奪われる病気は

ないはずだとし、木や草に魂が宿っているなら、ゆりにも魂が宿っていると考える。ゆりに魂がないのなら、なぜこの世界に生まれてきたのか？ もしゆりが草木と同じ性質なら、なぜゆりの泣き声は草木と違うのか？ ゆりは私が産んだ人間の子なのになぜ途中で魂が行方不明になったのか？などと、次々に夫に対して疑問を投げかける（195-198）。白居易の「長恨歌」には皇帝が楊貴妃の魂魄を求めて「上は碧落を窮め下は黄泉、両処茫茫として皆見えず」[10]という描写があるが、これと同様に、ゆりの母も魂魄を探している。ゆりの魂の存在を確信している母は、天国であろうが冥府であろうが、どこまでも娘の魂を探す決心をしている。ここには、母と娘の関係性が魂と魂との繋がりとして顕在化している。

また、桑原の写真作品や土本典昭の映像・散文作品が久美子の容姿にばかり注目していることとは異なり、「草の親」には久美子の「匂い」の描写が出てくる。

> うちは不思議で、ようくゆりば嗅いでみる。やっぱりゆりの匂いのするもね。ゆりの汗じゃの、息の匂いのするもね。体ばきれいに拭いてやったときには、赤子のときとはまた違う、肌のふくいくしたよか匂いのするもね。娘のこの匂いじゃとうちは思うがな。思うて悪からか……（196）。

男性の表現者が久美子を視覚的にしか描かないのに対し、石牟礼は思春期に入った少女「ゆり」の匂いをその母に嗅がせるという嗅覚的な表現をすることによって、男性の異性に対する視覚中心の視点を相対化し、独自の久美子像を立ち上げることに成功している。

「草の親」の構成が、主として母からの問いによって進行している理由は、おそらく石牟礼の深い心理的洞察にあると考えられる。災難や病気に遭遇したとき、人々は「なぜそのことが私に（あるいは家族に）起こったのか」という理由を探す。もちろん災難や病気の原因は自然科学的に説明することもできるのであるが、それとは別のレベルで、「なぜそれが自分たちに生じたのか」と問わざるを得ないのである。水俣市民の多くは漁民としての貧しさとみずからの「業」が災厄を招いたのであると自分を納得させた。幼児性水俣病患者の親はとりわけ「自分の業」の深さのゆえに不幸な子どもを生み出したと考えたのである（194）。石牟礼は長い期間にわたって数多くの水俣病患者と患者の家族と接することによって、彼らを一番悩ませることが「なぜ私に（あるいは家族に）この災厄が襲ったのだろうか」という反芻であることを理解していた。石牟礼自身も自然科学的因果法則を越えて物事をとらえる傾向があり、災厄の真の「理由」を究めたい願望が心の底に潜んでいたと思われる。そうした動因が「草の親」の語りにおける母の「問いかけ」の奔流につながっているのだろう。

第３章　首藤留夫の小説『生ける人形の告発』と『苦海浄土』

第１節 『生ける人形の告発』

1969 年 6 月 25 日に労働旬報社から首藤留夫著『生ける人形の告発』が出版された。初版『苦海浄土』の出版より 5 ヶ月ほど遅い。『生ける人形の告発』は松永久美子を中心とした小説である。作者の首藤は水俣病取材に携わった一人で、日本の第一号公害の悲惨な状況を目撃し、「生の形で記録しておきたい」、「この身振いするほどの悲劇を、どれほど伝え得たであろうか」[11]という気持ちに後押しされてこの作品を執筆したという。しかし、首藤留夫は『生ける人形の告発』の著者という以外に一切情報がない。取材にあたっては、主に松永久美子の両親、熊本大学医学部の武内忠男教授、入鹿山且朗教授、日本放送労働組合の大住正義、熊本日日新聞の上村重次記者、上村てる緒、熊本 NHK ニュース、読売新聞水俣通信部の藤森信一記者、カメラマンの猪口六郎などから資料を入手している[12]。熊本大学医学部の武内忠男教授は松永久美子が 1956 年 8 年 30 日に入院した熊本大学附属病院小児科の担当医で、入鹿山且朗教授も 1956 年以来熊本大学医学部“水俣奇病研究班”に属しており、信憑性のある情報が得られたと考えられる。武内忠男は 1956 年 8 月から熊本大学医学部における水俣奇病研究班結成以来ずっと研究に取り組み、同 11 月中毒性中枢神経疾患と発表した人物である。このような状況から、本書は信憑性がかなり高い。

本書が出版されたのは 1969 年 6 月であるが、その年の 1 月には『苦海浄土』が出版されていた。よって『苦海浄土』の芸術形式・表現方法も参考にし、取り入れたようである。『苦海浄土』と比較することによって、両者の性格をより立体的に考察できるだろう。

第２節　『生ける人形の告発』と石牟礼「草の親」との比較から見えるテキストの性格

『生ける人形の告発』というタイトルは人々を惹きつける。本書は29篇で構成されているが、「生ける人形」である久美子を直接描写した部分は、第6篇「久美子ちゃんの発病」、第7篇「悲しい宣告」、第23篇「生ける人形」、第29篇「ベッドのなかの青春―久美子ちゃんの告発するもの」の4編に過ぎない。全体の内容としては猫踊り病、水俣病患者遺体の解剖、チッソ水俣工場の廃液の調査、チッソ従業員の発病、チッソ工場正門前の患者家族の座り込み、胎児性水俣病の発見、ナンバー四〇〇秘密実験の追及など、社会的視点から見た水俣病事件を全般的に書いている。構成は「一よそ者」が水俣事件について時間を追って潜入調査した記録および、水俣事件の全貌を俯瞰する社会的・政治的分析となっている。タイトル『生ける人形の告発』は、当時すでに久美子が「生きる人形」として有名になっていたのを利用し、宣伝効果を狙ったものだろう。

『生きる人形の告発』における患者とその家族とのやりとり、また彼らの心境についての描写は平面的で個性が薄く、単に全体の構成を繋ぐ役割としてのみ機能している。例をあげると、水俣病の原因を探求する第三章「原因究明」では：

> 勝木教授が発言した。彼は脳神経の権威者として広く知られていた。
> 「臨床的にも、極めて特異な神経疾患だと思います」「脳炎症状からみて、中枢性神経疾患だと思われるが、これまでにまったく経験したことのない症状です」。あまりにも劇症が多いので驚いている、とも言った[13]。

まるで朗読劇か記者会見のように、会話は単純な資料提示になっており、小説などに見られるような人物の微細な表情や感情の変化、言葉の美しさなどの文学性と芸術性についての追求はほとんどなされていない。

対照的に、同じ年に同じように「ルポルタージュ」として宣伝され刊行された『苦海浄土』では、水俣病の原因探究のシーンは医学者の会話によって構成されるのではなく、胎児性水俣病の女子の母が父に対して愚痴を言う中で表現されている：

> ゆりはいったいだれから生まれてきた子かい。ゆりがそげんした姿しとれば、母ちゃんが前世悪人じゃったごたるよ。
> 悪人じゃったかもしれん母ちゃんは。おなごはどこに業を負うとるかもわからんちゅうけん、母ちゃんが業ば、おまえが負うて生まれてきたかもしれん（194）。

『生きる人形の告発』は当時、外部にあまり知らされていなかった水俣病の実情を伝えるため、自然科学的・社会環境的情報を大量に盛り込んでおり、作者および作中人物の感情と心境についての描写はほぼ存在しない。情報を発信することに重点を置いたため、作品中の発話者も意識的に医学者や政治家などが多く選ばれたのではないかと考えられる。石牟礼は一不知火の地ごろの女性の「共同的な感性」[14]を用いて、水俣病の原因を探るくだりにはあえて小児水俣病患者の親の独白の形式を選び、自然科学的な原因ではなく、超越的・宗教的な方向に発病の「理由」を求める語りを描いた。彼女は水俣事件の情報を外の世界に知らせるだけではなく、水俣事件がどれほどこの地域の生態系に壊滅的な影響をもたらしたかを伝えるため、冷たい数字や科学的情報では伝えきれない、当事者の感情に重点に置いて伝えようとしたのではないだろうか。この描写からは、罪のない子供が苦しむ姿を見守る親の気持ちが容易に想像できる。その状況に責任はないはずの親が自分のせいで子供が苦しんでいるのではないかと思い込む情景に、病気自体からの苦しみと病気によってさらに招かれた二次的な苦しみが重なり、重層的な苦しみの構造が成立している。『生きる人形の告発』が正確に情報を伝達することによって平面的な苦しみの構造を形成しているのに対し、『苦海浄土』の重層的・立体的な苦しみの構造は、水俣病がどれほど住民に身体的かつ心理的に絶望を味わわせているのかを、読者に自らその場に臨んでいるように感じさせる。その当事者の「感情」「感覚」を伝えようとする筆致と、「重層的感情の構造」は、石牟礼の患者への表象描写の特徴ではなかろうか。『生ける人形の告発』は事実の伝達を重視し、『苦海浄土』は感情・感覚の伝達を重視する傾向が見られるが、どちらも後世に読み継がれていくに値する作品と思われるので、ここで優劣を論じる必要はないだろう。

第3節 胎児性患者における娘と母との関係性

以下では、『生ける人形の告発』の第23篇「生ける人形」と『苦海浄土』の「草の親」とを対比し、患者の表象について比較考察していきたいと思う。

まず明らかなのは患者の母の設定である。患者の母（「生ける人形」では「マサ」、「草の親」では「さと」）と、患者である娘（「生ける人形」では久美子、「草の親」ではゆり）との関係性の相違である。「生ける人形」の「久美子」は12歳であり、「草の親」の「ゆり」は17歳となっている。モデルとなった1950年11月8日生れの松永久美子は、両書が出版された1969年には19歳になっており、湯ノ児分院に入院していた。「生ける人形」の母マサは、12歳の久美子の毎日の世話を既に諦めており、看病は病院の看護婦に任されている。

> 久美子ちゃんの病気が回復する見込みは、まったくなくなって母親のマサも、もう付添っていなかった[15]。

一方、「草の親」では、17歳になった「ゆり」を、母さとがずっと世話を続けている設定になっている。

> “奇病”にとりつかれた六歳のときから、白浜の避病院でも、熊大の学用患者のときにも、水俣市立病院の奇病病棟でも、湯の児のリハビリ病院でも、ずっと今までそうやって母親はきたのだ。姉娘は“軽症”だから入院できないから、家におかねばならない。夫は専業漁師をやめて失対人夫にゆく。だから母親は毎日は病院に来てやれない（192）。

「草の親」は、娘との接触を放棄せず、できるかぎり娘の世話に尽力している母親像を作りあげようという意図が読み取れる。医学論文『水俣病　20年の研究と今日の課題』（青林舎、1979年）の松永久美子のカルテからは、12歳以降の松永久美子の世話係りが誰であったかは特定できないが、土本典昭『不敗のドキュメンタリー　水俣をとりつづけて』の「水俣ノート」には、松永久美子の「すべて拒否的」な姿勢について書かれており、そこに「絶対的断絶」[16]を見出したという記述から推測すると、おそらく久美子は家族もしくは看護者との親密な交渉には恵まれていなかったことが推察される。

「生ける人形」における久美子の日常生活の世話で、最も詳細に描写されているシーンは食事の場面である。

> 「ご飯を食べんね、久美子ちゃん」付添婦はいつもそんなに呼びかけながら食事を運んできた。意識のない久美子ちゃんに聞こえるはずもない[17]。

> 付添婦が久美子ちゃんの口を開けて、スプーン一杯に盛ったご飯を口のなかに入れた。つづいて二杯目のご飯がつめ込まれる。すると、意識のないはずの久美子ちゃんの口が動きはじめる。ご飯を食べはじめたのである。動いている口のなかに、さらにご飯が注ぎ込まれる。仰むけの姿勢で、ある間隔をおいて久美子ちゃんの口は動いた[18]。

> そんな機械的な食事のなかでも、熱いものには反応を示した。少し熱いお茶のませると泣いてぐずついた。不思議だった。意識を失った久美子ちゃんの、唯一の意志表示とも受けとれた。それは久美子ちゃんだけではない。
> 水俣病患者は不思議に熱いものには極端に弱い。ほとんどの患者が熱いご飯は冷えるのを待って食べた[19]。

このように「生ける人形」では久美子の食事過程が詳細に描写されているが、それとは対照的に「草の親」ではゆりの食事に関する描写は母さとの語りの中で一文しかない。「生ける人形」での食事場面は人間性の欠片が一つも見いだせないほど残酷である。水俣病患者に共通した熱い食べ物が極端に苦手であること、その唯一の意志表示の方法のみが「泣く」という人間らしい行動であったことが示される。この描写によって、水俣病患者が日常に立ち向かう困難さが提示され、水俣病患者の生活をまざまざと読者に想像させることができる。

この機械的な食事の過程が事実なら、現実の久美子の母が彼女の世話を諦めたのは理解できよう。人間らしさを失った機械的なプロセスになり果てた食事の世話を毎日こなすのは耐えられない苦痛だろう。人間らしさがまったくない食事場面で、唯一人間らしさを保っているのは「熱い食べ物を与えると泣く」というマイナス反応のみである。娘は無感情な機械と思いきや、不意に人間的な一面を見せて泣く。それだけが娘の反応のみであるならば、母は耐えられないに違いない。土本典昭『不敗のドキュメンタリー　水俣をとりつづけて』の「水俣ノート」によれば、このように胎児性水俣病患者の親には我が子との断絶によって絶望を味わい、世話を諦める例も多かったようである[20]。

小結　もうひとつの世としての「草の親」

水俣病の罪悪の核心は「人間と人間との繋がり」の断絶だと「生ける人形」に記されているが、「草の親」ではその「人間と人間との繋がり」の修復への救済の祈りが表されているように思う。「生ける人形」にあるように、久美子に対して「ご飯を食べんね、久美子ちゃん」と呼びかけるのは付添婦であった。「草の親」では食事の前に「ゆり」に呼びかけるのは母「さと」である。

石牟礼は現実の松永久美子の食事の光景を目にしたか、あるいは情報をどこからか入手していたであろう。しかし胎児性患者に付き添うのを付添婦とせず、あえて「母」であるというフィクションにしたのは、「草の親」全編に一貫する「母と娘ゆりとの繋がり」を強調するためだろう。医学文書においても土本のドキュメンタリーにおいても、松永久美子と他者との関係は徹底的に一方向的であり、久美子の対外的反応は「食事が熱いと泣く」以外のものはなかった。

一方、「草の親」での「ゆり」と母親の関係では、現実の断絶の傷を修復しようとするがごとく、母の娘への愛情を強調し、娘から母への感情表現もわずかに描写される。母はゆりの魂がどこへ行っても付いていくと言うと、ゆりは涙を流す。「ありゃなんの涙じゃろか、ゆりが涙は。心はなあんも思いとよらんちゅうが、なんの涙じゃろか、ゆりがこぼす涙は、とうちゃん――」(199)と幕を閉じている。ゆりの涙が母の話を聞いて感動した涙かどうかは、石牟礼は明言していない。しかし、涙が出るという極めて感情的な反応で、石牟礼は母と娘との繋がりの存在を証明しようとしたのではなかろうか。

「草の親」に描かれている世界は、「生ける人形」と同様に水俣病の影に支配されてはいるが、水俣病が母と娘との繋がりを破壊しきってはいない世界である。描かれた世界は残酷ではあるが、現実の世界そのままではない。石牟礼は人間と人間の関係性が完全に断絶に至っていない世界をフィクションの力をもって描き、「もうひとつのこの世」を作り出すことで、ヒューマニティの喪失を阻止しようとしたのではないかと考えられる。

---

[1] 原田正純「小児水俣病の臨床症状」『水俣病　20年の研究と今日の課題』青林舎、1979年、p. 365。

[2] 武内忠男・衛藤光明「水俣病の病理各論」前掲書（1）、p. 509。

[3] 桑原史成「呪われた海は人間に仕返しをした」『桑原史成写真全集　第一巻　水俣』草の根出版会、2004年、p. 100。

[4] 桑原史成「生ける人形」『水俣事件』藤原書店、2013年、p. 37。

[5]『石牟礼道子全集　不知火』第２巻（藤原書店、2004年）p. 191。以下、同書からの引用はすべてここと同じく引用部のあとにカッコを付して当該頁数を記すことによって示す。

[6] 前掲書（1）、p. 365。

[7] 同上。

[8] 前掲書（4）、p. 37。

[9] 上野留夫「小児の水俣病」『水俣病　有機水銀中毒に関する研究』熊本大学医学部水俣病研究班、1966年、p. 86。誤字はそのまゝ。

[10] 川合康三訳注「長恨歌」『白楽天詩選』（上）岩波書店、2011年、p.72。

[11] 立津政順「精神症状」前掲書（9）、1966年、pp.148-153。

[12] 首藤留夫「あとがき」『生ける人形の告発』労働旬報社、1969年p.302。

[13] 首藤留夫前掲書（12）、p.82。

[14] 渡辺京二「石牟礼道子の世界」『苦海浄土　わが水俣病』講談社文庫、1972年、p.315。

[15] 首藤留夫前掲書（12）、p.238。

[16] 土本典昭「水俣ノート」『不敗のドキュメンタリー　水俣を撮りつづけて』岩波書店、2019年、p.13。

[17] 首藤留夫前掲書（12）、p.237。

[18] 首藤留夫前掲書（12）、p.238。

[19] 首藤留夫前掲書（12）、p.239。

[20] 前掲書（16）、pp.11-13。

（表 1）原田正純「小児水俣病の臨床症状」と武内忠男・衛藤光明「水俣病の病理各論」における小児水俣病患者 K.M.の症状（『水俣病-20 年の研究と今日の課題―』青林舎、1979 年）

時間	臨床症状（原田正純）	臨床症状（武内忠男・衛藤光明）
1956 年 6 月 8 日	流涎	（原田と同じ）
6 月 16 日	お茶碗を落とす、手指振戦、歩行動揺	手指運動不円滑
6 月 18 日		手指振戦、歩行障害、新日窒病院入院
6 月 20 日	ロンベルグ現象、失調性歩行、膝蓋腱反射亢進	
6 月 21 日	言語不明瞭、嘔吐	
7 月 4 日	歩行不能、頸部振戦、発語不能	（原田と同じ）
7 月 11 日	足クローヌス、寝たきり	視障害
7 月 30 日		発語不能、嚥下障害、睡眠障害、狂躁状態
8 月 30 日		熊本小児科入院
1957 年 6 月 5 日	全身痙攣、無動無言（失外套症候群）	
1959 年 7 月 29 日		水俣市市立病院へ転院
1965 年 3 月 12 日		湯之児分院へ移転、飲食は口の中へ入れてやれば嚥下可能で、過量になると閉口により拒絶した。
1969 年 6 月 16 日	自発運動が全くない、四肢変形、咀嚼運動はなし	
1972 年 7 月		再び市立病院へ移転
1974 年 5 月 22 日	発熱、呼吸困難	気管切開、鼻腔栄養にかえた
8 月 25 日	死亡	（原田と同じ）

（12,805 字）

The comparison of the presentation of Yuri from ’The Mother of a Weed ‘,” Paradise in the Sea of Sorrow” with the presentations of Matsunaga Kumiko in other media— featuring relationships between family

Lin I Chen

In this essay, two different sets of traits will be analyzed and compared with each other. fiction/ literature traits derived from Yuri from ‘The Mother of a Weed’, a chapter from "Paradise in the Sea of Sorrow” with clinical records, medical papers, photography works by Kuwabara Shisei and the novel “The accusation of a living doll” by Shuto Tomeo derived from infantile Minamata disease’s patient Matsunaga Kumiko. The composition of this essay focuses on three issues. First is to prove that Kumiko is the original inspiration of Yuri from ‘The Mother of a Weed’. Second is comparing Yuri with Kumiko from “The accusation of a living doll”, with an emphasis on the relationship between the mother and the daughter. Last is analyzing the reason why Ishimure depicts this particular relationship in such a beautiful glorifying manner.

In ‘The Mother of a Weed ‘the main part of the family's narrative is predominantly the mother's questions and complaints directed toward the silent father. An important point to note is that the mother utilizes the concept of "soul", and it indicates Ishimure’s psychological insight. When facing with disaster or illness, people naturally seek reasons as to why such things happened to them or their families. When it can’t be explained scientifically, the pain becomes unbearable. The parents of children affected by Minamata disease believed that they had brought sins upon their children. Ishimure knows that the most tormenting question for them was the constant rumination of "why did this disaster befall me (or my family)". Also, she has a deep-rooted desire to uncover the true "reasons" behind disasters. It is very likely that the motivation led to the torrent of the mother's questioning in the narrative of ‘The Mother of a Weed ‘.

It is said that Yuri’s mother took care of Yuri since she was 6 until 17 years old, while readers are made aware that Kumiko was not well taken care of, after she was turned 12. This was based on clinical records, medical papers, photography works by Kuwabara Shisei and depiction from the novel “The accusation of a living doll”. It can be considered that Ishimure wanted to preserve a world that focused on the relationship between mother and daughter that is not sabotaged by organic mercury compounds. And through creating this “another world of Minamata”, Ishimure wants to prevent from the sense of humanity to be lost, and this is another piece of evidence from the literature/ fiction traits of” Paradise in the Sea of Sorrow”.

（453 words）